

動詞と形容詞の形態統語論的な相違点について

田川 拓海

キーワード：動詞、形容詞、時制辞への移動、語形成、「ない」否定文

1. はじめに

日本語においては、形容詞という範疇は動詞と同じく屈折を持ち、そのみで述語として機能すると言われている。

- (1) a. 太郎がバナナを食べた。
b. 花子が一番かわいかった。

これまで日本語の統語論研究においては、例えば上記の例(1a, b)において、下線部分はそれぞれ「動詞/形容詞+た」と分析されてきた。しかし、すでに Nishiyama(1999)で提示されたように形容詞文は動詞文より複雑な形態統語論的構成を持つと考えられる。

本論文では、Nishiyama(1999)が提示したような形容詞の精密な統語構造を仮定することによって、動詞文と形容詞文のいくつかの相違点が説明できることを示す。また、Nishiyama(1999)では詳しく取り扱われなかった形容詞文の否定文の構造について分析し、動詞文の否定文との違いを明らかにする。本論文の主な主張は以下の通りである。

- (2) 形容詞文には(繫辞としての)動詞「ある」が含まれる。従って、
a. 動詞文では時制辞の支持(support)は動詞によって満たされなければならないが、形容詞文においては形容詞そのものではなくその動詞「ある」によって満たされる。
b. 動詞文の否定文における「ない」は機能範疇としての否定辞であるが、形容詞文の否定文における「ない」は「「ある」+否定辞」の具現形である。

本論文の構成は以下の通りである。まず、2 節において Nishiyama(1999)の形容詞文の分析を紹介し、本論文における動詞文と形容詞文それぞれの形成する統語構造についての

¹ 筆者は、語彙的要素の統語範疇は、文という環境に置かれたいと決定されたいと考えている (cf. Halle and Marantz(1993), 宮岡(2002))。よって本稿の分析の対象はあくまでも動詞/形容詞「文」である。「動詞/形容詞」という用語は、「動詞/形容詞文の核となる述語要素」の便宜的な表現として用いていることに注意されたい。簡便のために、問題が無い場合にはその「動詞/形容詞」のみを抜き出して例として提示することもある。

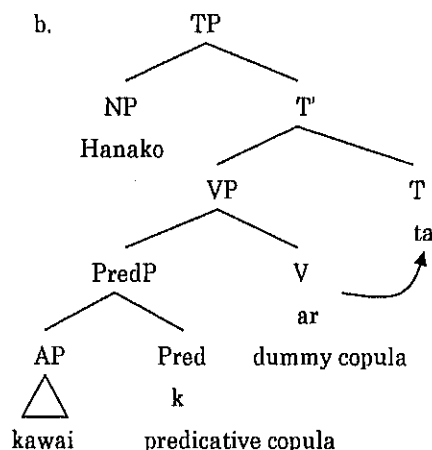
仮定を提示する。3節では接頭辞の付加と語彙的要素の複合に関する現象から、時制への移動に関する動詞文と形容詞文の違いを明らかにし、分析を試みる。4節ではテ形への接続、「～そうだ」、「～過ぎる」という複合述語、アクセントに関する現象から、動詞文/形容詞文の否定文の統語論的な相違点を示し、3節と同様の観点から説明されることを示す。5節では本論文の主張をまとめ、その問題点や理論的含意、今後の展望について述べる。

2. 動詞文/形容詞文の構造

2.1 Nishiyama (1999): 詳細な形容詞文の構造

Nishiyama(1999)は日本語の形容(動)詞文の統語論的、形態論的特性を詳細に分析している²。そこで提案された構造は概略以下の通りである³。dummy copula と predicative copula の定義は(4)のようになる。

(3) a. 花子がかawaiiかった。



(4) a. Semantically vacuous copula (= dummy copula)

The copula appears when there is a formal (syntactic or morphological) requirement

b. Semantically contentful copula (= predicative copula)

The copula is an essential ingredient for (non-verbal) predication.

² Nishiyama(1999)は統語的には形容詞と形容動詞には差が無いと主張している (cf. Baker(2003))。本稿では専ら形容詞について考察するので形容動詞に関する議論は割愛する。

³ Nishiyama(1999)の議論は様々な現象と通時論的、類型論的見地から構成されており、かなりの程度説得的であると考えられるが、Nishiyama(1999)の妥当性を検証すること自体が本稿の目的ではなく、詳しい検討は別の機会に譲る。Nishiyama(1999)に対する反論として Yamakido(2000), Namai(2002)を、さらに Namai(2002)に対する応答として Nishiyama(2005)も参照されたい。

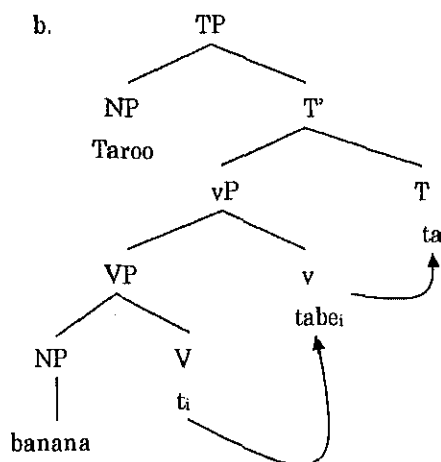
この分析に対してはいくつかの問題点も指摘されているが（脚注3参照）、本稿にとって重要なのは次の二点である。

- (5) a. 形容詞文における形容詞語幹と“k”と“ar”という要素はそれぞれ統語的に独立した要素である。
b. 形容詞文には統語範疇的には動詞である“ar”が含まれる。

特定の環境において動詞“ar”の存在が認められることはすでに Nishiyama(1999)によって示されているが、どのような条件下において“ar”が存在するのかという点については詳しく検証されていない。本稿では“ar”の存在が、Nishiyama(1999)が詳しく取り扱っていない否定文の場合などにも確認されることを示す。さらに、それが常に存在していると考えられるということを示唆する。

一方、動詞文の構造は次のように仮定する⁴。

- (6) a. 太郎がバナナを食べた。



動詞文には格付与と動詞句の事象性（eventiveness）に関与する機能範疇である“v”が存在すると考えられる（Chomsky(1995), Harley(1995), Kratzer(1996)などを参照）。

形容詞文における Pred と動詞文における v を両者共に語彙範疇句（AP/VP）を選択する機能範疇であると考え、両構造の違いはその機能範疇と時制句の間に「V(“ar”)が存在するかどうか」と言える。

また、この主張は上の例で言えば「食べ」と「かわいい」という要素が同じ統語的単位に

⁴ 実際には動作主である「太郎」は vP の指定部の位置（[Spec, vP]）に基底生成されると考えられるが、本稿の議論には関係しないので省略した。

相当するということを表している。これは、「食べ」という形態が動詞のいわゆる連用形であると言われるのに対して、「かわい」という形態は形容詞語幹であってその連用形は「かわいく」という形態であるというような考え方からすると一見奇妙であるかもしれない。しかし、本稿の見方が統語論的に正しいことはおおよそ次のような現象から確認することができる。

- (7) a. 明日は雨が降りそうだ。
b. 明日は 暑/*暑く そうだ。
c. 太郎は昨日走り過ぎた。
d. あのフェンスは 高/*高く すぎる

上の対比に見られるように、「～そうだ(様態)」、「～過ぎる」に接続する場合、動詞では連用形が現れるのに対して、形容詞は連用形ではなく語幹部分だけが現れる。これは動詞の連用形と形容詞の語幹部分が同じ環境に現われる、おおよそ同じ大きさの要素であることを示している⁵。

また、次の例に見られるように複合語を形成する場合にも、動詞の場合には連用形が現われるのに対して、形容詞では語幹部分が使用される。

- (8) a. 立ち食いする、殴り書きする
b. 薄切り/*薄く切り する、早食い/*早く食い する

これらの現象も、見方によれば動詞と形容詞の相違点の一つであるが、本稿のような構造((3b, 6b))を仮定すると自然に捉えることができる。3節以降ではその他のいくつかの現象もこの構造の違いによって説明されることを示す。

2.2 その他の仮定

2.2.1 時制辞への移動

日本語では次のように、動詞語幹と時制辞の間にとりたて詞が介在した場合に動詞「する」が挿入されるという現象がある。

- (9) a. 太郎は生徒を殴る。
b. 太郎は生徒を殴りもする。

⁵ ここで「おおよそ同じ」という表現を用いたのは、厳密に言うと動詞の連用形というのはいくつかの統語的環境に対応する形態であると筆者は考えているからである。詳細は田川(2005)を参照されたい。

これはすなわち時制辞が必ず動詞と融合していなければならないことを示しているが、その融合がどのレベルで起こるのかという点について日本語統語論では論争になっている。

(10) a. 動詞は統語部門において時制辞へ移動している。

b. 動詞は統語部門では移動しない。時制辞は形態的な操作によって動詞に付加される。

(10a)の立場は Otani and Whitman(1991), Koizumi(2000)などによって、(10b)の立場は石居(2003), Fukui and Sakai(2003)などによって主張されている⁶。本稿では(10a)の立場をとり、(10a)を仮定しなければこれから提示する現象が分析できないことを示す。この点については3節でもう少し詳しく述べる。

2.2.2 語形成の取り扱い

3節では語形成に関する現象が一つの大きな問題となるが、その取り扱いについて述べておきたい。

本稿では語形成は全て統語部門 (Syntax) で行われると仮定する⁷。本稿はこの仮定を検証することを第一の目的とするものではないが、これを仮定しなければ動詞と形容詞の間にある、ある相違点を捉えることはできなくなる。

本稿で紹介する現象への具体的な分析や、日本語の語形成への統語論的アプローチは稿を改めて論じる。

3. 語形成と時制辞への移動

3.1 接頭辞「小」、「お」

動詞文と形容詞文の差異を直接比較するためには、前節で取り扱った「～そうだ」、「～過ぎる」のように、両者共に共起可能な環境から観察することが重要である。ここではそのような現象の一つとして、動詞/形容詞の両方に付加しうる接頭辞に関する現象を見る。

(11) 接頭辞「小」

- a. 動詞: 小走り、小売り、小書き、小切り、…
- b. 形容詞: 小暗い、小ざかしい、小うるさい、小汚い、…
- c. 名詞: 小顔、小雨、小物、小魚、…

⁶ 時制辞への移動が存在しているという主張の証拠として挙げられている現象は、例えば動詞句削除 (VP ellipsis: Otani and Whitman(1991)), 等位構造からの ATB-movement (Koizumi(2000)) などである。Otani and Whitman(1991)への反論は Hoji(1998)を、Koizumi(2000)への反論は Fukui and Sakai(2003)を参照。

⁷ 語形成と syntax の関係についての種々の立場や理論については Borer(1998), Ackema(1999)を参照。

(11)に見るように接頭辞「小」は動詞/形容詞/名詞の三つの範疇全てに付加することができ、何かが「小さい」という意味を表す接頭辞である。しかし、動詞に付加した場合と形容詞に付加した場合ではその形態の現われに差が見られる。

動詞の場合は、「小」が付加すると、表面的な連鎖としては接頭辞が動詞に付加するだけであり、格体制なども変化しないが ((12b))、必ず「接頭辞+連用形+する」という形態で現れなければならない ((12c))。

- (12) a. 太郎はその薬を売った。
b. 太郎はその薬を小売りした。
c. 走る→小走りする/*小走る、売る→小売りする/*小売る

しかし、形容詞の場合には(11b)の各例からもわかるように、接頭辞が付加するだけで良く、動詞の例のように形態が変化することとは見られない。

- (13) a. 太郎の隣にいる人は汚かった。
b. 太郎の隣にいる人は小汚かった。

これは丁寧の接頭辞⁸「お」の場合にも全く同じ現象が観察される。

まず、「お」は「小」と同様、動詞/形容詞/名詞の三つの範疇に付加することができる。

- (14) 接頭辞「お」
a. 動詞: お待ち、お運び、お誘い、…
b. 形容詞: お若い、お強い、お美しい、…
c. 名詞: お店、お茶碗、お味噌汁、…

しかし、やはり動詞に付加した場合には「接頭辞+連用形+する」という形態で現れ ((15a, b))、形容詞の場合には形態の変化が無い ((16a, b))。

- (15) a. 先生を待った。
b. 先生を お待ちした/*お待った。
(16) a. 先生は昔、非常に強かったそうです。
b. 先生は昔、非常にお強かったそうです。

⁸ 厳密には、「お」が動詞に付加する場合、いわゆる尊敬/謙譲の両方を表すことができ、その形態も異なってくる。本稿にとってその差は問題となるものではないので、ひとまず「丁寧の接頭辞」と呼ぶ。

この二つの接頭辞に関する現象を見ると、次のような一般化をすることができる。すなわち、動詞の場合にはある接頭辞が付加すると時制と直接関係を持つ（融合する）ことができなくなるのに対して、形容詞の場合には同種の接頭辞が付加しても時制との関係に変化が無い。

この現象を分析する前に、次の節で接頭辞以外の語彙的要素が語幹部分に付加した場合でも同様の振る舞いが見られるという点について記述する。

3.2 語彙的要素の複合

ここでは、動詞/形容詞に、同じく動詞/形容詞、あるいは名詞が付加しているという、いわゆる複合語の場合について観察する。

(17) 動詞/形容詞/名詞+動詞

- a. 殴り書きした/*殴り書いた、寝冷えした/*寝冷えた、…
- b. 薄切りした/*薄切った、早歩きした/*早歩いた、…
- c. 値上げた/*値上げた、くじ引きした/*くじ引いた、…

上に見られるように、動詞に動詞/形容詞/名詞を付加させた場合にも 3.1 で見た接頭辞の場合と同じく、「接頭辞+連用形+する」という形態でしか現れることができない⁹。

しかし、形容詞の場合にはやはり、動詞/形容詞/名詞を付加させた場合でもその形態が変化するわけではなく、そのまま時制辞と結合しうる ((18a, b, c))。

(18) 動詞/形容詞/名詞+形容詞

- a. 打たれ強かった、見苦しかった、…
- b. ずる賢かった、浅黒かった、…
- c. 息苦しかった、腹黒かった、…

このように、接頭辞以外の要素、すなわち動詞/形容詞/名詞などの語彙的要素を複合させた場合にも、動詞は時制辞と直接関係を持つことができなくなり、形容詞は何も付加しない場合と変わらない、という一般化が成り立つのである。

⁹ 実際に、「小」、「お」以外の他の接頭辞に関しても同様の振る舞いが見られる。

¹⁰ いわゆる、語彙的/統語的複合動詞（影山(1993)）の場合はもちろん除く。

a) 殴り殺す、押し倒す、寝続ける、…

この場合には影山(1993)や松本(1998)も述べているように、項関係に関する複合が起こっており、「殴り書き」などとはタイプが違ふと考えられる。例えば、「殴り書き」における「殴る」は単に書く動作の様子を修飾しているだけであり、実際に何かを「殴って」書くわけではない。本稿で扱っている複合のタイプについては杉岡(2002)も参照。

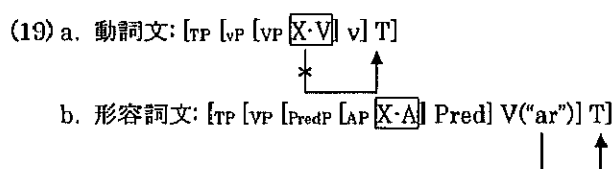
3.3 要素の付加と時制辞への移動

本節で記述してきた現象は、2節で仮定した動詞文と形容詞文の構造から直接説明されうるものである。

(3b), (6b)に示したように、形容詞文の場合には時制の支持という要求は形容詞語幹 (A) ではなく、“ar” (V) によって満たされる。一方、動詞文の場合には、時制の支持は動詞そのもの (V-(v)) によって満たされる。

ここで、語彙的要素 (A, V, N...) に何らかの要素が付加すると移動が不可能になると考えると、3.2 までで示した両文の違いが説明されうる。

すなわち、動詞文の場合には、時制を支持する要素そのものに付加が行われて移動が不可能になるため、動詞 (V) は元位置にとどまって連用形となり¹¹、時制辞は「する」による支持を受ける¹²。一方形容詞文の場合には、時制の支持を満たす要素は形容詞語幹ではなく“ar”なので形容詞語幹に何が付加されても全体としては付加されない場合と変わりが無いのである。簡単に図示すると以下ようになる。



“X”は接頭辞、あるいは動詞/形容詞/名詞の付加要素を表している。このように本稿で示した構造、特に形容詞文には“ar”が存在するという主張は、動詞文と形容詞文の違いを明示的に説明することを可能にする。

注意すべきことは、この分析は接頭辞や動詞/形容詞/名詞の主要部への付加を統語論的に扱っているからこそ可能であるということである。もし接頭辞などの付加がレキシコンで行われるという立場をとると、何も付加されていない要素も付加された要素も同じ統語的単位として取り扱われるので、なぜ統語論において時制の支持に関して差が生じるのか、という点をうまく捉えられない。

また、動詞に関して、「動詞の複合語は連用形を基体にして行われる」と仮定する立場では(影山(1993)など)形容詞(文)との差が直接捉えられなくなってしまう¹³。その場合、「動詞の複合の場合にはAの形態をとり、形容詞の複合の場合にはBの形態をとる」と仮

¹¹ このような場合に動詞が連用形をとる詳しいメカニズムについては田川(2005)を参照されたい。

¹² この「する」による時制の支持がどのような性質のものであるのかは、日本語の形態統語論的研究のために、より厳密に追求する必要があるが、本稿ではひとまず置いておく。このような動詞の「する」と形容詞の「ある」については詳しく、また興味深い示唆が宮岡(2002)にある。

¹³ また、このような考え方では、複合語に現われる連用形とその他の環境に現われる連用形(例えば連用中止法など)を結び付けて考えることができず、形態の具現に関しては「そのように現われる」と仮定するしか方法が無くなってしまおうと考えられる(田川(2005))。

定するしか無くなってしまうからである。

一方本稿では、従来語形成と呼ばれる分野で取り扱われてきた要素も統語論的に付加すると仮定することによって、その現象を時制の支持という形態統語論的現象と直接結び付けて考えることができるようになった。そうすると、3.2までで示した動詞文と形容詞文の体系的な違いもできるだけ少ない仮定によって説明することが可能になるのである。

4 動詞文/形容詞文における否定辞「ない」

4.1 二つの「ない」

本節では、動詞文と形容詞文に「ない」が付加した否定文について分析する。

(20) a. 太郎はりんごを食べ ない/なかった。

b. 花子はかわいく ない/なかった。

上の(20a, b)に見られるように、動詞に付加している「ない」と形容詞に付加している「ない」は同じ形態変化を示し、一見表面的には区別が無い。

しかし、実際にはいくつかの環境において差が見られることがある。本節では(3b), (6b)で示した動詞文/形容詞文の構造の違いからそれらが説明されうことを示し、動詞文/形容詞文の「ない」否定文には統語論的に違いがあるということを明らかにする。本稿の基本的な発想は次の通りである。

(21) a. 太郎にはお金がある。

b. 太郎にはお金が ない/*あらない。

(21a, b)に見られるように、主動詞として使用される「ある」の否定形は、「未然形+ない」ではなくて、「ない」そのものによって表される。本稿の考え方はこれを形容詞文にも敷衍しようというものである。すなわち、形容詞文にも(3b)で示したように「ある」が存在するので、形容詞の否定文に現われている「ない」も統語的には「ある+否定辞」と考える。一方、動詞文における「ない」は否定辞の具現形であると考え¹⁴。

4.2 テ形の形態

まず、4.2と4.3では形容詞文の「ない」否定文と主動詞「ある」の否定文が同じ振る舞いを、動詞文の「ない」否定文がそれとは異なった振る舞いを見せる現象について観察する。まず、ここでは「ない」否定文をさらにテ形にした場合について見る。

¹⁴ このように動詞文と形容詞文に現われる「ない」が違う要素であるという主張は宮岡(2002)などにも見られる。

(22) a. 太郎は *走らなくて/走らないで 歩いた。

(cf. 太郎はその問題が わからなくて/?わからないで 困った。)

b. 太郎は 若くなくて/*若くないで かっこよくもない。

c. お金が 無くて/*無いで こまった。

d. お金が 少なくなくて/*少ないで 恥ずかしかった。

(22a)に示すように、動詞の場合は「ないで」という形態が許され、形容詞の場合は「なくて」という形態しか許されない。これは、「ある」の否定形である「ない」文と全く同じ振る舞いである¹⁵ ((22c))。

これは、4.1で提示したような考えから説明される。動詞文の「ない」が単なる否定辞の具現形である(すなわち機能範疇的要素)とすれば、それに続けて「て」をそのまま付加できると考えられる。一方、形容詞文の「ない」は「ある+否定辞」、すなわち語彙範疇的要素なのでテ形にする場合には、主動詞の「ある」の場合と同様、必ず屈折しなければならない。これは形容詞文そのものも「い」の後にそのまま「て」を付加できない ((22d))ということからも伺える¹⁶。

4.3 「さ」の挿入

2節では「～そうだ」、「～過ぎる」という表現を用いて動詞文と形容詞文の性質を明らかにしたが、この両者の表現は否定要素を含むことができ、そこでも動詞文と形容詞文に差が見られる。

(23) a. 太郎は 走らなさ/走らな そうだ。

b. 太郎は 暑くなさ/*暑くな そうだ。

c. 太郎はお金が なさ/*な そうだ。

(24) a. 太郎は 勉強しなさ/勉強しな 過ぎた。

b. そのフェンスは 高くなさ/*高くな 過ぎた。

c. その時は時間が なさ/*な 過ぎた。

「～そうだ」も「～過ぎる」も否定辞の接続を許すが、動詞の場合には「さ」という形態の出現が比較的随意的である ((23a), (24a)) のに対して、形容詞の場合には必ず出現し

¹⁵ 参照例からもわかるように、動詞文の場合でも「なくて」という形態が許され、選択されやすい場合もある。テ形にも様々な種類があるのでさらに詳細な議論が必要であろうが、動詞の場合の否定辞は文法化の途中なのかもしれない。

¹⁶ 実際には、この場合の「て」がどのような要素であり、なぜ形容詞文などの場合の「い」と衝突するのかという点についてさらに説明する必要がある。しかし、そのためには日本語のテ形について詳しく見なければならないため、ここでは取り扱わない。

なければならない ((23b), (24b))。また、これも主動詞「ある」の否定文と全く同じ振る舞いである ((23c), (24c))。

この「さ」という形態がどのような要素であるのか、という点について現時点でははっきりとした分析を与えることはできないが¹⁷、機能範疇的「ない」と語彙範疇的「ない」という点で差があるのは明らかである。

4.4 アクセント

ここでは、4.1の主張のさらなる支持として、アクセントに関する振る舞いの違いについて見る。

一般的に日本語において、アクセントはある要素が自立的要素（語彙的要素、あるいは「語」）であるのかそれとも付属的要素であるのかを判断する大きな基準のひとつである。例えばどんなに長い要素を連ねてもそれが一つの語彙的要素の拡張形式である場合、アクセントの核は一つである（宮岡(2002)）。以下、アクセント核は「↑」で示す。

(25) 書か・せ・られ・た・がり・す↑ぎ・た

(25)の例では、たとえ「させ（使役）」、「られ（受身）」、「たい（願望）」のような動詞的、あるいは形容詞的屈折と、固有の意味を持つ要素を含んでいたとしても全体に一つのアクセント核しか与えられない。

この点を踏まえて、動詞文/形容詞文の「ない」否定文を見る。

(26) a. 太郎が夕飯を 食↑べに行った。

b. 太郎が夕飯を 食べ↑ない。

上の(26a)に見られるように、「食べ(る)」という動詞単独ではアクセント核は「食↑べ」というようになる。一方、否定文にした場合には「食べ↑ない」というように、「食べ」と「ない」二つあわせて一つのアクセント核が与えられる ((26b))。これは、動詞文の否定文が語彙的要素である動詞の付属的要素による拡張形式であるということを示している。

一方、形容詞文では次のようになる。

(27) a. 花子は かわい↑い。

b. 花子は かわい↑くな↑い/*かわい↑くな↑い。

c. 花子はお金が な↑い。

¹⁷ この要素については、管見の限りでは宮岡(2002)と竹沢(2004)にわずかに言及があるぐらいである。実際には個人差や方言差があるようであるが、筆者の周囲の日本人母語話者は(23a-c), (24a-c)の判定で安定した許容度を示した。

(27b)から明らかなように、形容詞文を「ない」否定文にした場合には形容詞語幹と「ない」で一つのアクセント核が与えられるのではなく、語幹のアクセント核は維持されたまま、「ない」にもう一つアクセント核が与えられる。ちなみに、このアクセント核は主動詞「ある」の否定文に現われる「ない」と同じである((27c))。これは、形容詞文の否定文における「ない」が、形容詞語幹からは比較的独立した語彙的要素であることを示していると考えられる。

このようなアクセントの違いについても、4.1 で提示したように、動詞文の場合の「ない」は否定辞の具現形という機能範疇的要素で、形容詞文の場合の「ない」は「ある+否定辞」という語彙範疇的性質を持つという点から説明される。

以上、4 節では動詞文と形容詞文の「ない」否定文に関するいくつかの現象を取り扱ったが、ここでも形容詞文には「ある」が含まれていることがそれらの現象における差の原因であると考えられることを示した。これまでも、動詞文と形容詞文に付加する「ない」の違いがあるという指摘は存在したが(宮岡(2002)など)、本稿ではそれらが「どのように違うのか」という点までも明示的に示すことができた。

5. おわりに

5.1 課題：形容詞の「-い」形

以上、本稿では一貫して動詞文と形容詞文の形態統語論的な差異に着目し、形容詞文には“ar”という動詞が含まれていることを示した。一方で、形容詞の詳しい派生については触れなかったが、形容詞の「-い」という形式をどのように捉えるのかというのは実は大きな問題である。

Nishiyama(1999)はこの「-い」の場合について、“ar”は現われていないと述べている。さらに、この時制を支持する“ar”は現在時制の場合には随意的(optional)に現われると仮定しているが、本稿の主張はこの仮定に疑問を投げかけるものである。

例えば、すでにいくつか例は挙げられているが、この「-い」という形式の場合にも接頭辞や他の要素の付加による形態の変化は見られない。

(28) 小暗い、お若い、見苦しい、ずる賢い、意地悪い、…

本稿の主張が正しく、またこの「-い」が時制要素であるならば、その支持は何らかの要素が付加した形容詞語幹ではなく、別の要素、おそらく“ar”によって満たされなければならない。また、本稿の4 節の議論も、少なくとも「ない」否定文に関しては必ずそのうちに“ar”を含んでいなければならないということを示している。

以上のことから、「-い」という形式をとる場合、すなわち表面上に現われていない場合にも、“ar”が常に存在すると考えなければならない可能性を本稿は示唆している。

このように考えれば、しばしば指摘されるように、「日本語の形容詞はそれ単独で述語となる」という点に関しても明確な解答が得られる。すなわち、日本語においてもやはり繫辞は常に存在するのである。

しかし、一方で実際に“ar”の存在を想定した上で、「い」という形式を派生する具体的なプロセスを示さなければならない。この点については他の現象も視野に入れた上で今後分析を深めたい。

5.2 理論的含意

上で述べた、「日本語の形容詞文には常に“ar”が存在する」という主張がすでに本稿の理論的含意の一つであるが、本稿の意義は日本語における語彙範疇的要素の具体的で精密な形態統語論的研究の一つのケーススタディを提出したというところにもある。

これまでは動詞（文）と形容詞（文）の差といえば、連体修飾として使用されやすいか否か、時制に縛られやすいか否かという点が取り上げられてきた（仁田(1998), 高橋(1998)）。しかし、両者にははっきりとした形態統語論的な差異も存在するのである。一方で、Nishiyama(1999)などの研究が出てきてはいるが、形式的な統語論研究においては動詞や形容詞などは単なる語彙範疇的要素としてあまり精密に分析されることはなかった。

しかし、本稿のようなアプローチを採用することによって、いわゆる日本語学、あるいは伝統文法といった分野で着目されてきた「活用」のような現象に関する知見を取り入れた形式的な研究が可能になるかもしれないのである。

また、このような視点から、日本語の一般的な語形成の理論や、時制への移動の可否などについて新たな現象と知見が得られるという点も重要である。

【参考文献】

- Ackema, Peter(1999) *Issues in Morphosyntax*. John Benjamins Pub Co.
- Baker, Mark C.(2003) *Lexical Categories: Verbs, Nouns and Adjectives*. Cambridge University Press.
- Borer, Hagit(1998) "Morphology and Syntax," *The Handbook of Morphology*. Andrew Spencer and Arnold M. Zwicky(ed.), pp.152-190, Blackwell.
- Chomsky, Noam(1995) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Fukui, Naoki and Hiromu Sakai(2003) "The Visibility Guideline for Functional Categories: Verb Raising in Japanese and Related Issues." *Lingua* 113, pp.321-375.
- Halle, Moris and Alec Marantz(1993) "Distributed Morphology and the Pieces of Inflection," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*, Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser(ed.), pp.111-176, MIT Press.
- Harley, Heidi(1995) *Subjects, Events and Licensing*. Ph.D.Dissertation, MIT.
- Hoji, Hajime(1998) "Formal Dependency, Organization of Grammar," *Japanese/Korean*

- Linguistics. 7, pp.649-677.
- 石居康男(2003)「第五章 主要部移動」『英語から日本語を見る』pp.149-196 研究社
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- Koizumi, Masatoshi(2000) "String Vacuous Overt Verb Raising", *Journal of East Asian Linguistics* 9, pp.227-285.
- Kratzer, Angelika (1996) "Severing the External Argument from Its Verb." *Phrase Structure and the Lexicon*. Johann Rooryck and Laurie Zaring(ed.), pp.109-137, Kluwer.
- 松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114 pp.37-83
- 宮岡伯人(2002)『「語」とはなにか: エスキモー語から日本語を見る』三省堂
- Namai, Kenichi(2002) "The Word Status of Japanese Adjectives", *Linguistic Inquiry*. 33, pp.340-349.
- Nishiyama, Kunio(1999) "Adjectives and the Copulas in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 8, pp.183-222.
- Nishiyama, Kunio(2005) "Morphological Boundaries of Japanese Adjectives: Reply to Namai", *Linguistic Inquiry* 36:1, pp.134-143.
- 仁田義雄(1998)「日本語文法における形容詞」『言語』27:3 pp.26-35
- Otani, Kazuyo and John Whitman(1991) "V-Raising and VP-Ellipsis," *Linguistic Inquiry* 22, pp.3345-358.
- 杉岡洋子(2002)「第3章 複数のレベルにまたがる語形成」『語の仕組みと語形成』pp.69-145 研究社
- 田川拓海(2005)「現代日本語における動詞連用形の形態統語論的考察—拡散形態論の観点から—」『日本言語学会第130回大会予稿集』 pp.110-115
- 高橋太郎(1998)「動詞から見た形容詞」『言語』27:3 pp.36-43
- 竹沢幸一(2004)「日本語複合述語における否定辞の位置と節構造」『日本語文法学会第5回大会発表論文集』 pp.175-184
- Yamakido, Hiroko(2000) "Japanese Attributive Adjectives are Not (all) Relative Clauses," *WCCFL 19 Proceedings*. pp.588-602.